

中上に附て倒にこれ有り、苞生じ亦二葉生じ、心中より嫩藕を生じ横行す、是藕の初なり、凡蓮に數種あり、皆變種なり、薄紅色の者と同種すれバ、變種ハ必枯る、秘傳花鏡云、或曰、春分前種一日、花在葉上、春分後種一日、葉在花上、春分日種則花葉兩平と、尤自生の者ハ其花葉上に秀づ、格物叢話云、荷花有重臺者、有雙々者、世人指以爲瑞、蓮ハ群花品中に於て第一品、清淨潔白なる者これに如す、故に不清の水を灌バ即枯る、又鹽氣を惡む、周茂叔愛蓮說云、蓮花之君子者也、賞せずんばあるべからず、

〔古今要覽稿 草木〕每葉蓮。

每葉蓮、普通の紅蓮にたがふ所は、立葉生すれば必花を生ずる故に名く、葩も常の蓮の葩より、丸く尖らずして、色も常の紅蓮に勝れり、葉も若葉のうちは紅を帯び、莖も葉莖花莖ともに下の方紅を帯べり、此每葉蓮の名は諸書ともに見えざれども、故桑名少將定信朝臣の蓮譜圖中に、每葉蓮の圖あれども、花やせて葩も細ければ、盆植の漸く開きしを寫されしなるべし、此每葉蓮いづれの種にや、詳ならざれども、今ま、あり、

〔輜軒小錄〕千葉蓮之事

此冊書寫の折節、井上毅齋氏の甥來り語る、江州益須郡田中村と云ふあり、其土豪田中氏園中に池あり、珍しき蓮をうる傳ふ、其様子を尋ぬるに、大白蓮にてわたり四五寸も有り、一莖の上にならぬの花房あり、みちあうて咲く、小なるは或は七或は三あり、中元の比より咲き初め、八月上旬まで咲く、其花落つることなく、來年まで枯れ殘る、萬葉蓮と云ふとなん、或云、此花とくとは咲き切らずと也、即群芳譜を見るに、千葉蓮と標し、分注云、花山有池、產千葉蓮花、服之羽化、今人家亦有之、然頭重易萎、多難開完となり、詳ならねど大樣此なるべし、

〔古今要覽稿 草木〕つまへに。くちへに。へりと。り。錦邊蓮。